
ケモ研～こちらケモビト研究会！～

しるく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ケモ研〜こちらケモビト研究会！〜

【Nコード】

N7755X

【作者名】

しるく

【あらすじ】

24世紀年を迎えた世界は激変していた。それは、獣の能力をもったケモビトの誕生。西暦2100年代、突如として現れた二人のケモビトという新人種は、自然交配などを繰り返して世界中に広がっていった。そして今やヒトとケモビトが共存するのは当たり前。そんな世界で今日ごくごく普通のちよつとヒト嫌いな柴犬のケモビトで主人公？柴澄 大成？はヒトとケモビトが共学する？私立嵩観獣人学園高校？通称ケモガクへと入学する。

そこで語られたヒトとケモビトの溝を埋め融和を目指すという学校方針に感銘を受けに受けまくった大成の幼馴染？沢井 奏音？がいきなり？ケモビト研究会？なる物を発足して……………

これはそのケモビト研究会通称？ケモ研？を中心に巻き起こるちょっと非日常的で色々目茶苦茶な波乱の日常を描いたお話。

く予習ーく（前書き）

予備知識的な物です。

少しづつ手を加えていくかもしれません。

〈予習！〉

〈私立高観獣人学園〉

通称ケモガクと呼ばれる獣・人共学の高等学校。

教育方針は？ヒトとケモビトの融和と協調？

〈ケモビトとは〉

2100年代に発見された？獣の力を持つ人間？の事を指して言う言葉。

その後自然交配や人工交配等によって急速に世界に広まっていった。発見直後は獣人等と言われていたが、いつしか誰が読んだがケモビト（ケモノ＋ヒト＝ケモビト）と略されるようになった。

ケモノ譲りの高い身体能力を持つケモビトは社会においてなくてはならないものになった半面ヒトからの風当たりは強いものになってしまっていた。そして誕生から二百年という歳月は、ヒトとケモビトの間に見えない壁を作ってしまった。

そのためこういった人種間での犯罪や事件が後を絶たず、一種の社会現象化している側面もある。

ケモビトは、その体躯に関わらずベースとなった生物で一応カテゴリー分けがされており犬や猫など（大型犬小型犬に関わらず）はカテゴリーS。

少し大きくなってカンガルー等の生物がカテゴリーMそして象などと言った超大型生物をカテゴリーLと分類している。

ケモビトとはいえ、姿形はヒトでありその能力を使う時に耳や爪等の特徴的な部分が現れる。

その状態を？ハーフリンク？と言う。何も使わずにケモビトが能力を使用できるのはここまでが限界であり、より効率よく更に能力を

引き出すためには専用に開発されたデバイス？ビースト？を使用する。

デバイス？ビースト（BEAST）？BEASTING Ability open Structure programming T rance foam device？）ケモビトの能力展開による形態変化するデバイス？

ケモビトが能力を安定的にかつ効率的に使うために作られたデバイスで、待機状態ではただの直径五センチほどの小さな球体でしかない。

このデバイスは、持ち主のケモビトのベースとなった生物を装着と同時にくみ取って、持ち主によって様々な形に変形したり能力の増幅デバイスとして機能する。そのため――

一人それぞれたとえ同系統のケモビトであつても全く同じものは存在しない。武器として形をなす物を？アクティブ型？形を成さず増幅デバイスとして機能する物を？ブーステッド型？と言う。特に呼称が決まっているわけではないが、各々が勝手に名前を付けている。（付けていない人も多い）

本来、かなり武器の色が濃いデバイスであるが、ケモビトがその能力を誤って暴走する危険性もあることからそれを抑制するデバイスとして普及している。

学生など未成年にはシステムにリミッターがかけられた物が一般的に能力を適切な判断力で使用できるとされる中学の卒業時に渡されており、

高校入学時点であらかたビーストは持ち主のベースとなった生物の能力を把握しそれに準じた形や能力を持ち主に授けている。

またこのデバイスによる事故や事件を未然に防ぐために、デバイスが攻撃対象をケモビト以外と認識すると、自動的に待機状態に戻るヒトの保護機能セルフデイステムが組み込まれている。

しかし、物によっては不正に取り外されているものも存在している。

〈闘争本能〉

ケモビトが？ビースト？を使用する際に消費する？気力？の事でいわばエネルギー。ケモビトが持つその本能に呼応して？ビースト？はその能力を行使し形を変化させたりそのデバイスを間に挟むことで？闘争本能？を具現化して打ちだしたりそれを纏うことで身を守る事もできる。

？ビースト？はこの本能を波長として読み取り、それをデータ化し情報を固定化して具現化させる。

当然個体差があり、この本能の量が？ビースト？の使用時間に比例する。

一般的に、巨大な？ビースト？であればあるほど一回当たりに消費する？闘争本能？は大きくなる。

ケモビト研究会

奏音が立ち上げたサークル。

部活動の主な物は、所謂なんでも屋みたいなもので、ヒトケモビト関わらず相談に乗りそれを解決するという物。

部活動理念は？ヒトとケモビトの調和！？とかなり「ざっくりして」更に、かなり「くくりが大きい」が奏音曰く、「ヒトやケモビトの相談にのってそれを解決すればそれだけケモビトの見方や評価も変

අපි භූමිමාලිකා කළමනාකරුවන් වෙමු.

く予習！く（後書き）

ISの二次創作を書かせていただいていますしるくと申します。

今回新たにオリジナル小説を書こうと思ひまして、予備知識的な物を書かせていただきました。

皆さんどうぞよろしく願ひします！

くプロローグ

西暦2100年代。

いわゆるケモビトという人種の始まりは、一人のヒトだったらしい。でもそのヒトは、人間と呼ぶにはあまりに異様であった。

手足や身長などは、平均的な人間のそれだったが、異様だったのは頭部に生えた動物の様な耳そして尻尾だった。

その当時でも、萌え要素として定着していたネコミミや尻尾の類。だがそれはあくまでアニメやラノベ、コスプレの世界だった。

しかしその人間には、確かにあったのだ。

頭部に生えたまるで犬の様なピンっと立った耳とふさふさの尻尾が。

その当時の人々は、地球外生命体だの未知との遭遇だのと騒ぎ立てその？始まりの種？を捕え、さまざまな検査や調査を行った。

そして研究者達が発見したのは、その？始まりの種？が持つ高い身体能力とそしてまるで獣その物の様な嗅覚や聴覚を有していたという事だった。

身体調査と共に進められたのが、後に全世界へと急速にこの種が広まる要因を作ったと言われる人工交配だった。

最初は、このすぐれた種を後世に残さねばならないという研究学的見地から、それが次第に民間にも広がって言ったのだ。

ヒトは、より優れたヒトを望む。

他よりも優れたものになりたいという一種の欲が、その？種？を世

界にばらまいていったのだ。

そして？ 始まりの種？ の発見そして世界への急速な広がり…… それらが始まった2100年から時は過ぎゆき西暦2301年……。発見から二世紀もの長い年月を経た世界でいつしかその種はこう呼ばれるようになっていた。

ヒトでありながらケモノである存在。

ケモビトと

朝日まぶしく、降り注ぐマンションの一室。

そこで、布団にくるまって眠りこける一人の少年が居た。
めざましは疾うに鳴り終え、眠りこけるこの部屋の主にたたき落とされている。

もう彼を起こせるものは誰一人として

。

「このバカたれがあッ！！！」
「うおうッ！？」

……いた。

一人の少女が乱入し、その少年の布団を引っぺがしたのだ。

「お、おまッ！？」

「何回ベル鳴らしたと思ってんのよッ！！」

「鍵閉まってただろ！？」

「だから親切丁寧に大家さんに鍵借りたわよッ さあ、起きなさい。

あんた今日が何の日か分かって寝てたわけ？」

「……よかった、蹴破ってなくて」

「なんですってーッ」

「うごッ！！」

少女は、器用に片手でくると掛け布団を丸めて未だ目のさめきらない少年に投げつける。

フンつと鼻を鳴らして腰に手を当てる少女。彼女はこの布団を投げられて、起きたそばから彼を若干のノックアウト状態に陥れた幼馴染

染 さわい 沢井 かなね 奏音。

ちなみに先ほど少年が、蹴破らなくてと安堵したのは彼女がカンガルーをベースに持つケモビトだからだ。

カンガルーの脚力は大型種になれば80kg以上ある身体を、跳躍

によつて時速70kmという速度にまで持つて行く。
ヒトが食らえば真面目に内臓破裂である。

そんな脚力を奏音は、受け継いでいるのだ。

実際奏音はこの少年の玄関の扉を幾度となく蹴り抜いている。

そして布団を投げられたこの少年は、しばすみ柴澄 たいせい大成。

この世界では、あまり珍しくはない犬をベースに持つケモビトで、
細かく分けると名字の通り柴犬である。

好きな物は甘いもの全般。

能力はごくごく普通に、嗅覚聴覚が優れている程度の一般的な犬の
ケモビトだ。

「だ、大体お前不法侵入だろ！」

「何が不法侵入よッ！ 起こしに来てあげてるんだからありがたく
思いなさいッ！」

そう奏音は大成にとって目覚まし代わりの様な存在でもある。

大成は、色々訳あつて今、一人暮らしをしている。

そのため、寝坊しないように一応めざましはセットするのだが、結
果は先ほどの通り……。

だがなんにせよ、起こしに来てくれるのはありがたい。

……まあ少々手荒いのは、なんとかならないものかと思うが。

「とにかくッ！！ ほらとつとと着替えなさい！ あんた今日入学

式でしょう!!」

「お前は俺の親かッ!?　ってか今日入学式なのお前も一緒だろ」

「いいから着替える~~~~ッ」

「分かった分かったから、とりあえず部屋から出てけッ」

大成は奏音を、無理やり部屋から追い出して鍵を閉める。

ひとまず嵐が去り、安堵しながら滅茶苦茶になった布団を直しつつ大成は着替え始める。

奏音が言ったように、彼は今日高校の入学式を迎える。

クローゼットを開けると、そこには色々私服に混ざって真新しい紺を基調とした制服が顔をのぞかせていた。

大成は、制服を取りだすとそれを椅子に一旦掛けて寝巻を無造作に脱ぐ。

そしてパリッとアイロンのかけられたカッターシャツに袖を通し、エンジ色のネクタイを締めその上から紺色にエンジ色の縁どりのされた裾丈の少し長いブレザーを着る。

最後にスラックスを履きベルトを締めて着替えは終了だ。

ちなみに女子制服は、基本的な色合いは変わらずスラックスがスカートになる程度の変化で奏音がその格好であった。

「終わった?」

「ああ、今行く」

大成はタイミング良く掛けられた声に、短く返して鍵を開けて部屋を飛び出す。

もちろん鞆は忘れていない。

大成はリビングに掛けられたいた時計をちらりと見やる。

「うわ、本当にヤバイな……」

「だから言っただしょうが……全く」

「とりあえず急ごうぜ」

「誰のせいよ」

大成は奏音を急かしてバターロール二つをこれまた器用にくわえて、下駄箱の上にあつた封筒をバツと取って家を後にする。

それは入学案内の封筒で、そこには大成が入学する学校の名前が記されていた。

私立^{かすみじゅうじん}嵩観獣人学園。

ヒトとケモビト共学という意味の獣・人だが一般的に獣と学をもじって？ケモガク？と呼ばれている。

大成の家から一番近い高校にして、この地区唯一の学術機関だ。

大成はそこに今日入学する。

？共学？という言葉に少し不安と若干の戸惑いを覚えながら……

柴澄 大成の波乱の日常が幕を開けた。

〽プロローグ〽（後書き）

さてプロローグを終えて。

中々オリジナル小説というのは難しいですね。

二次創作だとヒントを原作から得られるのですがね（汗w

それでは、次回から第一話です。
よろしく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7755x/>

ケモ研～こちらケモビト研究会！～

2011年11月15日19時15分発行